

畜産振興 かげの功労者 小林芳治さん(78才)



南部忠平さんと小林芳治さん

インタビュー 元農協職員 佐々木 昇

去る2月18日午前10時、新得市街本通2丁目の小林芳治さん宅を訪れました。

あらかじめ電話で、訪問の趣旨を告げてありましたので、初対面の奥さま共々、忌憚なくお話しいただき装蹄業ひとすじに精進されてきた小林さんの人間性にふかく感銘いたしました。

私と小林さんの出会いは、1937年(昭和12年)12月に私が新得産業組合(現新得農協の前身)に就職して最初に担当した業務のひとつに、蹄鉄料金の代払事務があり、この料金支払を通じてのことでした。

当時は、一部の畑作酪農家を除いては、年1～2回のみ現金収入であり、蹄鉄料金についても、いわゆる「秋払い」というのが殆どであったことから、産業組合が町内蹄鉄業者と交渉、料金を協定して、組合がこれを代払いしていたのが、この事務でした。

その頃の蹄鉄屋さんは、新得では平塚治行さんと獣医の小林尚俊さん、屈足では小林芳治さんと菊地清三さんの4軒で、料金の協定や着業資金の借入等には、小林芳治さんが代表となって、農会や産業組合に出入りしていたようです。

尚、昭和12年当時の協定料金は、次の通りでした。(いずれも肢4本分の料金)

削蹄が20銭。夏鉄が60銭。冬鉄が80銭で、これら馬1頭の平均標準利用回数としては、削蹄が月1回。蹄鉄は2～3カ月に1回とのことで、挽馬や種雄馬等の大型馬で6号以上の蹄鉄の場合は、1円20銭～1円50銭であったそうです。

又、特殊な蹄鉄としては、すべり止めのついた氷上蹄鉄、蹄(ひづめ)や肢の病気(外側捻転・内側捻転等)を治療する目的である変形蹄鉄の装着にあたっては、あらかじめ、駐立あるいは歩行中における肢蹄の状態を調べるなどの「装蹄判断」を要するので、手数と時間が多くかかるが、技能に自信をもっていた小林さんとしては、大いに遣り甲斐があったということです。

さて、当時の農耕型態は、馬耕が主体であり、又、昭和6年の満州事変勃発から日中戦争への突入(昭和12年)という、いわゆる、日本の中国侵略が拡大されつつあった時代でもあり、軍用馬の需要も増加の一途をたどっており、加えて食肉としての需要もふえつつあったときでしたので、どの農家も3～4頭は飼養しており、これら馬の用役(農耕・

運搬・乗用等）に対応した装蹄によって、その馬の能力を最大に発揮させるということが装蹄師としてのうでであると云われ、技倆のよい装蹄師は、獣医よりも重宝がられていたのも、その頃でした。

特に、貨物自動車による運搬が普及しはじめた昭和10年代から、道路にバラス（砂利）が敷かれたので、蹄鉄のいたみもはげしくなり、又、家畜市場の開設による売買の一般化や、家畜品評会等の町村単位開催も年中行事化するにおよんで、馬の優劣についての自他の比較も容易になったこともあり、益々、装蹄師の技倆評価が農家のあいだに浸透したように考えられます。

また、装蹄の効用は、単にひづめの磨滅を防ぐばかりでなく、蹄のすわりをよくし、肢蹄の疾病や損傷、蹄の変形の予防あるいは矯正をもするところから、小林さんの場合、四ツ足を見たゞけで、その馬の能力や値うちが、およそ判るので、自分が手がけた馬の成長に技能士としての誇りと生きがいの毎日であったことが、そのことばの端々からも感ぜられました。

さて、小林さんは明治41年（1908）3月10日、秋田県阿仁合村生れで、3歳のとき幾春別で母親に、10歳（大正7年）のとき旭川で父親に死別するという不幸な幼少年期でありましたが、以後長姉の許で鹿追村笹川小学校を、秀才2人組の1人として卒業（大正9年）後1年余り営林区の日雇いをしておりましたが、姉婿にあたる新得の平塚治行さんの肝入りで、奈井江村の矢野卓平装蹄所に住み込みで弟子入り修業し、昭和5年（1930）4月、東京で施行された蹄鉄工免許の国家試験に、若冠22歳で合格。たゞちに屈足21号（現在の幸町）で装蹄所を開業。その秋に結婚し、はじめて家族というものの有難さを、しみじみあじわったそうです。

しかし、小林さんの人柄と装蹄技倆に惚れてむ農家が多く、年余にして職人を雇うようになり、住みこみで喰わした他、月10円から15円で山崎・清水・野沢・村形さん等にそれぞれ働いてもらったそうです。



南部忠平さんと小林芳治さん

そうして、昭和18年（1943）子女の教育等の事もあり、新得市街に移転し、昭和43年（1968）60歳の還暦を期として、40余年の装蹄業に終止符をうちました。

装蹄師仲間の殆んどは、その職業柄、馬の値うちにあかるいので、家畜商の免許をとり、装蹄は二の次ともなっていたバクロウ（家畜商）の全盛時代もありましたが、小林さんは終始一貫、只々、四ツ肢と取り組んで、うまのはなづらをなせるような事

をしなかったことは、当時の畜産業界としては特異な存在でもあり、又、新得町における家畜の改良に尽した役割が、いかに大きなものであったかを、私は農協業務を通じて知り得たのであります。

特に畜力農耕がトラクターにとって代えられ、往時の馬糞風も昭和ひとけたまでの思い出となった今日、蹄鉄は既に過去のものとして忘れ去られようとしておりますが、新得町農業の黄金時代をきずいた昭和前半における畜産振興の真の功労者は、蹄鉄ひとすじに生きてきた小林さんではないかと思ひます。

その、かたくなまでに四ツ肢にこだわった小林さんの半生には、その青少年時代を風雪に耐えて修業した徒弟制度によってもたらされたところの職人かたぎがしめした最後の抵抗ではなかったかとおもひます。

小林さんは3男1女の子福者。息子さんはそれぞれ、国鉄・舗装会社・道警等の要職にあり、いまは教職にあるお孫さん達に会える夏休みを楽しみにしているようです。

別添写真は新得畜産試験場の視察で通りかかった南部忠平氏（1931年10月走幅跳で7m98の世界新記録をつくった）が立寄ったとき、一緒に来た氏の妹さんが写した即成写真であり、小林さんでは装蹄所関連のものは、これしかないとのことでした。

あのとき、小林さんが“うちの財産はこれだけです”と云って奥からもってきたのが昭和5年に取得した「蹄鉄工免許試験合格証」でした。小林さんにすれば、これが取得に要した10年の辛苦と忍耐と勉強によって、やっと掴み得た栄冠であり、財産であり、しかも国家的に一人前と認められた技能士のあかしでもあったので、開業以来つねにこれを念頭におき、技倆をみがき、時流にながされず、ひとすじに四ツ肢と取組んできたのであります。

生来の潔癖をとおされた小林さん……、いつまでも元気で長生きしてください。

